

## 2019年聖霊降臨節第一主日礼拝

### 「教会の喜び」ルカ 10:17～20

#### 【聖書】

17 七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」18 イエスは言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。19 蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。20 しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではいらない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

#### 1 ナザレン伝道会議

先週、11日火曜日から13日木曜日まで大阪で開催された日本ナザレン教団伝道会議に出席してきました。正直、全く期待していたなかったのですが、よい意味で裏切られました。講師は同盟教団の朝岡勝牧師でした。牧師を一時休職して神戸の改革派神学校で学んだ方です。冒頭の一文を講義のレジメから引用します。「伝道の不振が叫ばれて久しい日本の教会です。教会に人が集まらない。信徒は高齢化し、教会から子供達が減っていく。教会の存立が危ぶまれるように危機感が漂っています。聖書の解釈はますます多様化し説教者はなにを語り伝えればよいのか困惑し、伝道の閉塞感の中で徒労感、失望感に覆われ、召命が揺らいでいる。こうした現状を日本の教会は突きつけられています。そのような中で新しい伝道論、新しい伝道方策が脚光を浴びてはやがて消えていき、また新しい伝道論が生み出される。その度に教会も牧師たちも焦りにも似た感覚に囚われて、次から次へと新しいことを試してはみるものの、どれもすぐに効果がでない。やがて疲れ果て、諦めてしまい、教会はますます内向きになっていく。その一方で世界は救いを待望し、人々は光を求めてさまよい、命の水を求めて飢え乾き、御言葉の危機の時代を迎えている。」「こうした現実の中で、なお、私たちは伝道する教会でありたいと願う。あらためて伝道する教会になろうと願うのです。そのためには、やはり御言葉に聴くという姿勢がどうしても必要です」。そして、主イエスのあり方、その人格と御業に注目し、次のように力強く断言されます。「私たちの伝道は、この主イエス・キリストが語られ、生きられた姿、その人格と御業を伝えること」。伝道の本質に切り込む講演でした。

朝岡先生はこうも話されました。「神さまがどのようにして人を導くか、その救いのからくりは、人間には分からない」「だから、伝道とは、教会を維持発展させるための事業ではないし、スケジュールを立てることができるプロジェクトでもない。神が出会わせてくださった目の前の一人の方が神の子としての喜びの命に生きて欲しいと祈り願いつつ、イエス・キリストを伝えることが伝道で

ある」。伝道とは本来、イエス・キリストによって救われた喜びの命に生きる一人一人が主イエスを伝えていく業である…というのです。それを行うのはバラバラの個人ではなく、教会に連なる一人一人。つまり、伝道は教会の喜びの働きである…と語られました。横浜ナザレン教会の伝道についての考え方が間違っていなかったことに大きな励ましを受けて、横浜に戻ってまいりました。

今日の聖書テキストは、主イエスに遣わされて出て行った七十二人が、主イエスのもとに戻ってきた時の会話です。短いテキストですが、教会の伝道とはどういうものか、その喜びとはどういうものかが語られています。ご一緒に見ていきたいと思えます。

## 2 悪霊に支配される人間

主イエスと弟子たちの会話は、伝道の成功に高揚する17節の弟子たちの報告で始まります。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」この弟子たちの報告を聞いて皆さん、どう思われるでしょうか。自然科学が発達した現代世界に生きる私たちは、「古代世界の人々は悪霊の存在を信じたかもしれないのだけれど、科学的な知識のある自分たちは、『悪霊』なんて荒唐無稽な話は受け入れられない」と思うかもしれません。しかし、私たちは、『悪霊』を、昔話の中のつくりごと、迷信ですますことができるでしょうか。

悪霊にとりつかれているとしか思えないような悲惨な事件が、私たちの住む国では起こっています。今朝も大阪で警察官を襲い拳銃が奪われたとニュース速報が報じられました。世界に目を向けても、惨たらしい戦争はやむ気配がありません。誰も殺し合いなど望んでいない筈なのに、戦火は絶えることなく続きます。日本に世界に目を向けるまでもないでしょう。自分自身や周りの人を見ていてもそうです。時には悪魔的な思いにとらわれ、自分や家族、親しい人を傷つけることもあるし、原因が分からない無気力に苛まれることもあります。人間はいつも愛にみちて立派に生きることができるほど強い存在でもなければ、自由な存在でもない事を日々突きつけられます。病や日々の労苦に心身ともに疲弊し、キリスト者であっても父なる神から遠ざかることもしばしば起こります。

時代特有の目に見えない力があります。「天皇の代替わり」で無邪気なお祭り騒ぎをしている人々の陰で、被造物に過ぎない天皇を神格化する動きは着実に進んでいます。「天皇を掲げて長い歴史をもつ日本は素晴らしい国だ」と耳障りよい虚言で人々を惑わしているのは、「女性は子どもを三人は産んでもらわねば困る」と発言する人たちです。問題は異なりますが、相手を人として見ることができず、数字の一部として捉え、自分たちの「道具」とみてしまう。自分たちに都合のよい国を造るためのコマとしてしか国民を見ることができない人々。彼らはまた、自分たちが造り出す「時代の悪霊」の虜となっているでしょう。

人を人として見るができない…それは政治的社会的な話に広げなくても、私たちの日常生活の中でも言えることです。私たちは時代の悪霊から無縁ではありません。発達する情報網を通じて、悪霊は私たちの目と耳を偽りで満たし、私たちを束縛する縄目を強くしています。

### 3 自由にされた人間たち

そのように悪霊に支配されている私たちを自由にするために、主イエスは七十二人を遣わされました。そこで17節「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」という出来事が起こります。この「屈服する」というギリシャ語は、戦争に負けて服従するという意味の軍隊用語だそうです。主イエスのお名前を掲げる弟子たちとの闘いに悪霊は破れ、打ち砕かれ投稿し、主の支配下に入るというのです。そして悪霊の虜となっていた人間は解放されます。そういう力が主イエス・キリストの名前にはあるというのです。名前とはその人の存在そのものです。つまり、目に見えない悪魔的な力から人間を解き放つ力が、十字架と復活の主イエス・キリストにはある…と弟子たちは証言しているのです。

本当でしょうか。二千年前、主イエスがこの地上におられた時はそうだったかもしれない。だが、現代世界でそんなことが本当に起こり得るのだろうか？ 懐疑的な思いを抱かれる方がいるかもしれません。

しかし、確かに弟子たちが報告したことはこの現代日本で起こっています。それは今朝のこの礼拝堂の中を見ても明らかです。十数人の皆さんが集まっていますが、まさに皆さん一人一人が、イエス・キリストによって悪霊の支配から解き放たれたお一人お一人だからです。何度か話しておりますが、私自身もそうです。今から振り返ってみると、イエス・キリストを知らずに生きていた四十年間は、自分が何者かもわからずに、人間の考えに、自分の欲望に囚われ悪霊の支配のもとに生きていた月日でした。それは極論すれば「○○でなければ、人として生きている資格はない」と理解していた事によく現れています。その私が、十字架と復活の主イエス・キリストを知って大きく変えられた。私がどのような存在であろうとも、イエス・キリストは私を深く愛し、十字架にまでついてくださった。それだけでなく、私の命を善き命にしようと、私のうちに住んでくださっている。「そんな神さまがいるんだ」イエス・キリストを知った時、自分の思いから解き放たれ、それまで灰色一色だった世界が美しい色を取り戻し、一気に開けたような思いがしました。自分が何者か、人間が何者か、はじめて腑に落ちた思いでした。

しかし、洗礼を受けてキリスト者として歩み始め、神の愛を見失うこと度々でした。ですが、その度に聖霊は私を主イエスの十字架のもとに引き戻して下さり、私が既に父なる神の愛のうちに入れられている事に新たに気づかせてくださいます。そんな時にはいつも自分の移された神の支配の大きいことに感

嘆せずにはられません。この世界をぐるっと見回して「ああ、神の国ってなんて大きいのだろう、深いのだろう、高いのだろう、広いのだろう」といつも新たに感動します。それはなにものにも代え難い大きい喜びです。

そうしていると、どうやら顔つきが変わったようです。久しぶりに合う親戚のおばさんから、「洋子ちゃん、誰かいい人ができたの？」と聞かれたことがあります。主イエス・キリストは、人間を造り変えるのだと実感した時でした。悪霊としか言いようのない目に見えない力に縛られ不自由に生きていた一人の人間を、無限の広がりをもつ神の愛のうちに解き放ち喜びを与える力がキリスト・イエスにはあります。私たち一人一人は、その証拠です。

#### 4 伝道する教会

長い間、いろんな事情で伝道できなかった教会は、このように人を造り変えるイエス・キリストの力を見ることができません。そして知らず知らずのうちに教会じたいが主イエスの力を疑うようになり悪霊によって目と耳をふさがれてしまうのです。それはとても恐ろしいことです。一方で伝道する教会は、イエス・キリストには人を変える力があることを、度々実感します。

イエス・キリストを信じるようになる経緯というのは人それぞれです。朝岡先生のいうように、「神が人を救うカラクリ」は、人間には分かりません。ただひとつ確かなことは、イエス・キリストには人を救う力があるということです。イエス・キリストは、喜びの命を与えてくださるということです。だから、伝道する教会、主からこの世へと遣わされる教会は、イエス・キリストの力を新しく知り続けることとなります。福音の力に驚き続け、喜び続ける教会です。それが教会の肢である一人一人をキリストにあって豊かにするのです。そうして、キリストの体なる教会として、神の民として整えられていきます。全知全能の神が、ご自身の力を直接に使うのではなく、私たち人間のような罪を犯しやすい弱く愚かな欠けのある土の器を用いてイエス・キリストを宣べ伝えさせるのは、伝道を通じて私たちを神の民として訓練する意味があるのではないかと思います。

#### 5 七十二人は私たち

だから、私たちは、今日のテキストに出てくる七十二人の弟子たちです。なにも持たずにそれぞれの場所へと遣わされるのは、誰だろう私たちです。「そんな事ない、財布ももっているし袋靴だっちは持っている」と思われるかもしれませんが、私たちがもっていると考えているものは、みな時の流れの中で消えていくものです。今、持っているもののうち、私たちが天に召される時手にしているものがどれほどあるでしょうか。ましてや天に持っていける持ち物など何もありません。神のみ前では私たちは無一物。ただ、イエス・キリストという御名だけを身に帯びて出かけていく一人一人なのです。この礼拝が終わった時

にも私たちは家にそれぞれの場所に散じますが、それは七十二人が主に遣わされて出かけて行ったように、それぞれの場所にキリスト・イエスに遣わされて出かけていくことです。

私たちが七十二人であることは、聖書テキストに現れています。七十二人の派遣の物語を取り次いだ6/2の礼拝で、「七十二とは世界に住む民族の数だと考えられており、異邦人世界への伝道がここに描き出している」と取り次ぎました。まさに私たちもユダヤ人ではない、もともとは神の民ではない外国人です。異邦人であり、そして異邦人達、神を知らない人々に神の国を宣べ伝えています。

さらに、七十二人よりの前にガリラヤの町々に遣わされた使徒と呼ばれる十二人は、全て名前が残っています。しかし、その十二使徒とは違い、今回の七十二人は名前が記されていません。教会の歴史の中で大きな足跡を残した十二使徒と比較すれば、平凡で無名な信仰者達です。私たちもそうです。しかし、主イエスはそのような平凡無名の信仰者をも、ご自身の代理人として遣わしてください。まるで、名前の知られていない弟子たち、私たちは、自分の名刺のかわりに主イエス・キリストの名刺をもって働きに行く者達のようなのです。「キリスト・イエスに属する者」として、自分ではなく、主イエス・キリストを伝えていきます。父なる神の愛を知らない人々に、イエス・キリストの十字架と復活を宣べ伝え、神の義なる愛へと解き放つのです。

すべての人が受け入れるとは限りません。それは出来事の性質からいって当然なこと。信仰者が起こされるというのは、神の業であり、ひとつの奇跡なのですから。ここには直接報告されていませんが、弟子たちも冷たい無視やからかいを受けたのではないかと推測します。しかし、百人のうち九十九人が見向きしなくても、たった一人がイエス・キリストに出会ってくれたとしたら、弟子たちは大きな喜びに包まれたでしょう。神の奇跡を目の当たりにする事だからです。人々にイエス・キリストを伝え、不安の中で生きていた一人が神の愛に生きる平安に満たされ、大きく変えられる奇跡の証人となることは喜びです。かけがえのない人が救われた喜びは人数ではありません。悪魔や悪霊は人数で捉えませんが、主はそうはなさいません。主イエスはその後、ルカ福音書第十五章で言っています。「言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」(ルカ福音書 15:7)。一人の人が救われる喜びは、天の喜び、神の喜びです。私たちは神に喜ばれる一人として、イエス・キリストを伝えるのです。

## 6 激しい戦い

そんな喜びを報告する弟子たちに主は言われる。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。」主イエス・キリストによって神の国が進

み、救われる人々が増えていきました。地上の悪霊たちは追い詰められます。これを見ていた悪霊たちの親玉であるサタンはたまらなくなり地上にやってきた…という解釈があります。悪霊の親分がやってきた以上、地上での信仰の闘いは激しくなります。実際、主イエス・キリストの十字架と復活のあと、聖霊が降ってできた教会は、激しい迫害にあっていることは、歴史が語るところです。私たちは経験したことのない暴力的な迫害でした。

ですが、私たちが全く迫害を受けていないかということそんなことはありません。私たちがまた異なる形の迫害を受けています。イエス・キリストを信じ、この方に従って行こうとすることは、一面、人間が統治するこの世とは別の支配のもとに生きるということだからです。人間の王国ではなく、神の王国に生きる者となるからです。この世の人々が喜ぶもの—例えば人間を神とするようなことは決して受け入れることはできません。人間の欲望が無条件に肯定されることもよしとはしません。人間中心主義を謳歌している人々とは異なる価値観のもとに移されます。無視される、からかわれる、中傷される、不平を言われる、様々に神から引き離そうとする試みを受け、私たちは揺さぶられます。目に見えない悪魔の力です。狡猾に私たちそれぞれの弱点を狙って、神から引き離そうと誘惑してきます。私たちは主イエス・キリストの名を、父なる神の御名を呼び求めつつ、これと戦わねばなりません。

## 7 主から頂く力

ですが、「恐れることはない、不安に思うことはない」と主イエスがおっしゃいます。主イエス・キリストが弟子たちに、私たちに力をくださるからです。それは、蛇やさそりさえも踏み砕く力だと言います。蛇やさそりは、神から人間を引き離す不吉な力の象徴であり、人の命をそこなうものの代表格です。「蛇やさそりを踏み砕き、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を与える」との約束です。だから私たちの命が損なわれることはないのです。命とは肉の命ではない、神のみ前の自分という存在です。神との関係で私たちは確かにされているのです。そのように私たちを守る「権威」とは、神の権威であり、神そのもの、霊なるイエス・キリスト、聖霊と言えます。だから、私たちは、自分の力で闘わなくてよいのです。主の力、私たちの中に住んで下さる霊なる神に、ひたすら助けを叫び求めて闘います。

これは決しておとぎ話ではありません。日常生活の中の現実的な闘いです。私たちがサタンや悪霊の試みをうけるのは、まさに生活の中だからです。誰にも多少を問わず利害が対立する人がいるものです。家族との生活でも友人との語らいでも「カチン」と来ることはたくさんある。無気力や怠惰に囚われることもあるし、祈りから引き離されることもあります。健康な時でもそうですから、病気になるれば尚更です。あらゆる時と所で神と自分と人を愛する闘いが起こります。だから私たちは、主イエス・キリストを思い起こして御名を呼び求めつつ闘

うのです。パウロが「絶えず祈りなさい」と勧告したのはこの闘いが絶えずあることを示しています。ある牧師は、日常生活における闘いを「主イエス・キリストの御名を刻む闘い」と言いました。私たちが生活の中で、十字架の愛であるキリスト・イエスを思い起こし、心を開き、イエス・キリストの御名を呼び求め、聖霊に助けて頂く、そうして私たちの心にキリスト・イエスを刻みこむ、繰り返し繰り返し恵みの刻印を押してもらい、そうして、一層キリスト・イエスの者となり、キリスト・イエスを伝えていく、これこそ、神の伝道ではないでしょうか。

## 8 人の喜び

そうした七日間を過ごして、主イエスのもとに戻ってきた私たちは、それぞれに報告をします。この礼拝は、過ぎた一週間のひとつひとつを思い返し、主イエスに報告をする場でもあります。主イエスの闘いを戦えた時、私たちの心は踊り、高揚感に満たされて主イエスに報告することでしょう。そこで主イエスは、弟子たちに、私たちにおっしゃいます。「**悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。**」

主イエスは人間というものをよくご存知でした。私たち人間は成功の結果を喜んでいくといつしかそれが目的となってしまう、最も大切なものを見失いやすいからです。今日の弟子たちの言葉にも、私たち人間が陥りやすい過ちの兆候がはっきりと見えています。17節「**主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。**」悪霊が屈服したのは、主イエスの御名に現れている神の義なる愛の力であり、弟子たちに屈服したわけではありません。しかし、彼らは自分たちに悪霊が屈服したと喜んで高揚しています。ですが、自分たちの行いの成果だと喜び高揚するのは、悪魔の思うツボだと主イエスは弟子たちを諭されます。「**悪霊が屈服する**」という目に見える結果を自分たちが出したと喜んでいくと、本来の目的である「**主イエス・キリストを伝え神の国を宣べ伝える**」という目的を見失ってしまうからです。

それは冒頭で朝岡先生がおっしゃった教会の伝道を混乱させている大きな要因だと私は思います。主イエスを通じて神の愛を知り、救われる。その喜びゆえに周りの人に主イエスを伝えていく。世の人々が教会に集い、教会の力はまし、人々も賞賛します。この賞賛にばかり目をとめ喜んでばかりいると、やがて教会に多くの人を集めることが目的となってしまう…人間の弱さです。私たちは容易に自分たちだけの満足、自分たちだけの喜びを追い求めてしまうから。いつしか、「**人を多く集めること**」が目的となります。そして、「人間の罪なんて話すと世間の人煙たがるから、神の愛だけ語っておけばいいじゃないか」ということになるのです。人の世に忖度して神の言葉を伝えることができない、悪魔は、教会の目と口を塞ぐのに成功したとほくそ笑んでいることでしょう。

## 9 まことの喜び

全てをご存知の主は、だからこそ、おっしゃいます。「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」私たちの行いは、流れゆく時の波間に消えていきます。ですが、神のみ前にあるものは最後まで残ります。天の国に書き残された私たちの名前も残ります。名前とはその人の存在を示すものだとは先ほど申しました。つまり、「天に書き記されている私たちの名」とは、私たち一人一人のことです。私たち自身が天に刻みこまれているのです。父なる神のみ前に生きる私たち一人一人の永遠の命を示しています。父なる神が大きな喜びと愛をもって天に刻まれた私たち一人一人です。そこに神の喜びが詰まっています。神の喜びは永遠の喜びです。絶望に打ち勝ちいつも新しく輝く喜びです。

地上では私ども一人一人が日常生活においてイエス・キリストを思い起こし、その名を自分の心の板に刻んでもらっています。恵みの刻印を押して頂いています。それができるのは、既に天において父なる神が私たちを刻み込んでくださるからです。恵みを受けるものとして既に定めてくださっています。このことを何よりの喜びとしたいと願います。そして、既に神の子とされた確かな平安のうちに、神の国を宣べ伝えながら、主のあとを慕っていきたいと切に祈り願います。